

二、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(解答は全て句読点、記号も一字とする。)

A 乳幼児は、文字通り、「手当たり次第」にものを手に取り、触れることによってその存在を確かめ、識り、キオクする。触覚こそは意識や言葉とともにある人間の証あかしと言っているいいものである。意識や言葉は触覚からできていると言ってもいい。

B 人間の触覚には、じかにものに触れたときの直接的触覚だけではなく、道具によって間接化された触覚が蓄積されている。直接的触覚は間接的触覚とともにあり、間接的触覚と直接的触覚との二重性ゆきには触覚は存在しえない。それが人間の触覚であり、この種の特異な触覚は人間にしか存在しない。棒でカタいプラスチック合板の机を叩いたときには、カンカンという音がする。カンカンという音に表面のつるつるした触覚を「聞く」。また、もう少し柔らかい木製の机を叩けば、力が吸収されてトントンと低い音がする。この音に、木の厚みや木の質感をも「聞」いている。逆に木の表面のいくぶんにぶい色や光に、トントンという音を「見」、ザラザラとした触覚を「見」ている。このように、じかに触れているときにも間接的感覚が積み重なっており、間接的に触れたときにも直接触れたときの柔らかさや冷たさを感じとる「五感総合」の仕組みになっている。

C こつという「質感」感覚は人間にしかない。動物は自然とともにある自然そのものであって、動物がどのように感じるかを、もはや人間は理解できない。□□□□人間はすでに、間接化したカタさや温度感、滑りやすさなど質感を伴ってしか感じる事ができないからだ。

D タイシヨウは同じものであるはずなのに、触覚や音などが違うのはなぜなのか、という直接と間接のムジユンのなから、人間の言語は生まれたのだと考えられる。□□□□海にじかに入れば冷たい感覚が伝わってくる。ところが、棒で水を叩いてみると、しびきが上がってペチャペチャと音がする。自分が歩いたときと海は同じはずであるのに、感受する触覚は違っている。これはいったいどういふことなのか。それゆえ、人間の言葉には必ず「なぜ」が含まれている。□□□□イギ申し立てをする「しかし」も必ず入っている。この二つは、言葉の本性である。

E 子どもは、ある時期になると「なぜ」を連発する。「なぜ空は青いの？」など、答えよつのない問いかけもするが、これは言葉の本質からくる。言葉を学習するカテイで不可避の段階なのだから、こつという質問をたくさんする子どもに育てたほうがよい。また、その次には反抗期、□□□□「しかし」の段階がやってくる。「お母さんはそついうけれど……」「とついうイギ申し立てをして、言葉を鍛えているのである。「行きなさい」と言えば「行かない」、「行かないほうがよい」と言つと「行く」など。

F 言葉には必ず正反面の意味が入り込んで成立している。「賢い」といふ言葉は、字書を引けば「賢明」といふ意味しかのっていない。□□□□言い方によっては「愚昧」を表すことがある。逆接と逆説性をもつからこそ言葉は成り立っていく。人間はなぜ生きていけるかと言えば、死んでいっているからだ。細胞がどんどん死んでいくから新しいものが生まれると言ってもいいし、また、人間が生きるといふことは、少しずつ死に至る道を歩んでいると考えてもいい。言葉は、それ自身を成り立たせなくする否定の意味を必ず含んでいる。

G ある人を好きだ、と思っても、それは五〇・〇〇〇パーセントの話である。にもかかわらず、百パーセント好きないように感じているだけのことなのだ。これはマヨネーズの原理である。マヨネーズは、酢つまり水と油と卵からできている。水と油を卵黄のなかの界面活性剤成分レシチンがつないでいる。酢の中に油を注いでいくと、最初のうちは水性の液体だが、ある瞬間に一気にマヨネーズ、つまり油性の粘稠状態ねちゆうたいに変わる。これは五〇・〇〇〇パーセントの油分により劇的に油性と化したためである。言葉も、喩えれば、マヨネーズのような状態しか存在しない。百パーセント油、百パーセント酢、とつうことはないのだ。そつでなければ、すつかり夢中になっていた相手に対する気持ちも、突然さめるようなことはありえないではないか。

H 人間の触覚は、直接と間接の二重性の上に成り立ち、人間は、広義の「触」の快感に生きている。世界は触覚できあがっている。ものものの触れるきわで起こる触覚は非常に微妙な感覚である。スーパールのレジ袋を開けると、若い人は手に油と水分があるので引つかかるが、年をとってくると手が滑る。そこで水をつけるのだが、レジ袋と指のあいだの濡れの状態によって、うまくいったりいかなかったりする。わずかな水の量一つで変わってしまう。触覚は、人間が最も微妙に発達させてきた感覚で、手はもちろん、口も髪の毛一本であつてもただちに感知する。書と書字は、この触覚をベースに成立しているのである。そしてこの触覚は、単独で成立しているのではなく、視・聴・嗅・味・触の分けられない総合的感覚としてありつづけている。

石川九楊『書く 言葉・文字・書』(中央公論新社)

愚昧…おろかで、道理に暗い様子。

問一 傍線部 a) e のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みを平仮名で答えなさい。

【解答】 a 記憶 b すべ c 矛盾 d 過程 e げきてぎ

問二 傍線部 「手当たり次第」の意味として適当なものを次の中から全て選び、記号で答えなさい。

ア 何でもかんでも イ 一つ一つ ウ 片っ端から エ 順序よく オ むやみやたらと

【解答】 ア・ウ・オ

問三 傍線部 「特異な触覚」とは、どのような点で「特異」なのか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 直接的触覚と間接的触覚は、それぞれ別の役割を持ち存在する点。
イ 触覚は意識や言葉をつくるという重要な役割を担うものである点。
ウ 直接的触覚と間接的触覚の両方が人間の触覚を成り立たせている点。
エ 間接化された触覚は動物にはなく、人間にしかないものである点。
オ 直接的触覚によって、間接的触覚が付属的に生み出される点。

【解答】 ウ

*傍線部「得異な触覚」の少し前の「それ」が何を指すかをとらえること。「それ」が指すものは、「間接的触覚と直接的触覚との二重性ぬきには存在しえない」人間的触覚のことである。「二重性」によって、人間の触覚は成り立っているのであるから「両方」とあるウが正解となる。

問四 波線部 「カタ」、波線部 「タイショウ」、波線部 「イギ」と同じ漢字を用いるものを次の中からそれぞれ選び、記号で

答えなさい。

「カタ」
ア 雨降って地カタまる。
イ カタイ石で釘を打つ。
ウ カタ苦しい雰囲気に含まれる。
「タイショウ」
ア 二人の性格はタイショウ的だ。
イ 大学生をタイショウとした講座。
ウ 比較タイショウをして吟味する。

「イギ」
ア 学ぶイギを見いだす。
イ 同音イギ語を調べる。
ウ 会議でイギを唱える。

【解答】 イ イ ウ

* 「カタ」 ア固 イ硬 ウ堅 「タイショウ」 ア対称 イ対象 ウ対照
「イギ」 ア意義 イ異義 ウ異議

問五 傍線部 について、次の問いに答えなさい。

(1) A「じかに触れているとき」 B「間接的感覚」 C「間接的に触れたとき」 D「直接触れたときの柔らかさや冷たさを感じとる」とは、本文中において具体的にどのような表現を指しているか。次の中から当てはまるものを全て選び、記号で答えなさい。

ア カンカンという音に表面のつるつるした触覚を聞く
イ トントンという音を見る
ウ 机を叩いたとき

エ ザラザラとした触覚を見る
オ トントンという低い音に木の厚みや木の質感を聞く
カ 木の表面のにぶい色や光を見たとき

(2)「積み重なっており」と同じ意味で使われている語を本文中から漢字二文字と漢字一文字で抜き出さない。

【解答】 (1) **Aウ Bア・オ Cカ Dイ・エ**

*傍線部 直前の「このように」が指す箇所は、「棒でカタいプラスチック」触覚を「見」ている。「である。その箇所と照らし合わせていくと、次のようになる。」

「じかに触れているとき」＝棒でカタいプラスチック合板の机を叩いたとき、柔らかい木製の机を叩いたとき

「間接的感覚」＝つるつるした触覚を聞く、木の厚みや木の質感を聞く

「間接的に触れたとき」＝木の表面のにぶい色や光を見たとき

「直接触れたときの柔らかさや冷たさを感じるとる」＝トントンという音を見る、ザラザラとした触覚を見る

【解答】 (2) **二重性 蓄積**

*筆者は、人間の触覚に関して「じかにものに触れたときの直接的触覚だけではなく、道具によって間接化された触覚が蓄積されている」「間接的触覚と直接的触覚との二重性ゆきには触覚は存在しえない」と述べており、この二つの文は同義である。よって、答えは**二重性と蓄積**となる。

問六 空欄 に入る語として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア なぜなら イ そして ウ むしろ エ すなわち オ たとえば カ それゆえ キ しかし

【解答】 **ア オ イ エ キ**

問七 二重傍線部「カンカン」「トントン」「ペチャペチャ」のよつな表現を何と言つか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 擬態語 イ 擬人法 ウ 擬声語 エ 隠喩法

【解答】 **ウ**

*擬声語：事物の音や人・動物の声などを表す語。

問八 傍線部「正反両者」とは、それぞれ何にたとえられているか。言葉はマヨネーズにたとえられていることをふまえた上で、本文中から適当な一字を抜き出さない。

【解答】 **油 酢** (順不同)

*言葉には必ず相反する意味が入り込んで成立している。そしてその言葉は、「喩えれば、マヨネーズのような状態でしか存在しない」とある。この文の直後に「百パーセント油、百パーセント酢」ということはないのだ」とあることから、**油と酢**が導き出せる。

問九 傍線部「逆説性をもつ」慣用句として正しいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 立て板に水 イ 急がば回れ ウ 青菜に塩 エ 鬼の目にも涙 オ 焼け石に水 カ 住めば都

【解答】 **イ**

*急がば回れ…急ぐときには、危険な近道より、遠くても安全な本道を通るほうが結局早い。

問十 傍線部「相手に対する気持ち」が、突然さめる」とは、どのようにたとえられているか。本文中から三十字以内で抜き出し、初めと終わりの三文字を答えなさい。

【解答】 **ある瞬ゝわる。**

*人を好きになったときの気持ちの動きをマヨネーズの原理で説明している。

問十一 傍線部 「非常に微妙な感覚である」ことがわかりやすく示されている部分を本文中から二十文字以内で抜き出さない。

【解答】 わずかな水の量一つで変わってしまった。

* スーパーのレジ袋を開けるときに、レジ袋と指のあいだの濡れの状態によって、うまくいったりいかなかったりするの、それだけ触覚が微妙な感覚であることの表れである。

問十二 本文には次の文が欠如している。どの段落の初めにくるものか。本文中の段落番号AからHで答えなさい。

「こつこつ」「反抗」「や」「反対」は、言葉の本質である逆説性に隠れている。

【解答】 F

* 「こつこつ」「反抗」「や」「反対」が指す箇所を探せばよい。ここでは、段落Eの子どもの反抗期のことを指している。